OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	集落共同墓地と生活空間の立地選定の特徴に関する考察 : 三重県志摩地方の神島, 菅島, 石鏡の集落を事例に
Author(s)	下田, 元毅
Citation	デザイン理論. 2012, 59, p. 88-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53353
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

集落共同墓地と生活空間の立地選定の特徴に関する考察
── 三重県志摩地方の神島，菅島，石鏡の集落を事例に ──

下田元毅／大阪芸術大学

１．研究の目的と背景

本研究は，生活空間と墓地との関連が明確である「集落共同墓地」を対象に，そこに見られる墓地立地の空間的特徴を把握することを目的とする。主に民俗学的な視点でしか研究されなかった墓地，墓制研究を空間的側面から記述することは，新たな墓地，墓制研究の着眼点と知見を深めるのに有意義であると考えた。

対象集落は，三重県鳥羽市神島集落，菅島集落，石鏡集落の現地調査を行い，その立地選定の特徴を把握するために，集落共同墓地と集落の関係を⑴領域区分，⑵動線，⑶断面形状の３つの視点から空間的な分析を行った。これらの集落は，海の陸地に沿って住居群が展開している集落で，海と直接面した斜面地に居住域が分布し，集落住民のほとんどが海を生業空間としている。斜面地の集落は，地形的要因や営みの活動をしていくうえで，住居域の確保や後背地の漁村林等の利用等，限られた土地利用のなかから墓地の立地選定が行われていると考えられるため，明確に墓地の立地要因を探るうえで有効であると考えた。また，両墓制という同じ葬送の文化圏であり，集落間の生業を通した祭事のコミュニティーの共同性をもつことから，墓地立地を地形的要因だけでなく，志摩地域の基層文化の背景からその比較を通じて，類似性と差異性をみることができると期待した。

２．神島における墓地の敷地選定の特徴

神島の墓地の敷地選定では，特に厳しい土地利用の制限と死への忌避感があるなかで，選定の認識が働いたと考える事ができる。⑴両墓制の墓制である志摩地域にも関わらず単墓制が採用されていること，⑵地盤が砂浜，更に北からの強い風の吹き溜まりとなるすり鉢状の地形であるため住居を建てることができない場所，などが選定の要因に挙げられる。

神島では，集落を形成していく過程で，ムラという住居域が先行してその領域を確定し，土葬に必要なある程度広い土地が確保できた砂浜の延長の北側斜面地にある場所が選定されたと考えられる。そのうえで労働空間である海からの視認性が高い場所が選ばれたのは，墓地に葬られた親族や集落住民が，やがては豊かな恵みをもたらす祖霊となるという感情が少なからず働いた結果と考えることができるのではないだろうか。

３．菅島における墓地の敷地選定の特徴

菅島の墓地の選定には，ムラを避けてその両端のヤマに埋め墓，詣り墓が立地しており，ムラを避けた墓地立地が優先されるという住民感情をみることができる。比較的平地が多いなかで，埋め墓は，ハマという労働空間から離れた場所で，砂浜という埋める際の利便性を兼ねた場所として選定されたと考える。詣り墓は，急傾斜地でありながらも寺院の後背地であり，海を望むことができる場所として現在の位置が選定されたのは，適切だと考えることができる。

４．石鏡における墓地の敷地選定の特徴

海と対峙するような埋め墓は，住居域からの視覚とは隔離され，独立した場所として成

立している。傾斜地を人の手による造成がされ，掘込むように創られている墓地空間から，埋め墓としての墓地選定の際，ムラからの距離や葬送の利便性や遺体に対する忌避感等のなかで，適当な場所がなかったことが伺える。現在は公園となっている詣り墓であった場所は，住居域の中心であり，寺院の隣接という日常における墓参等の利便性などから推測してもその立地は適当である。注目すべくは，両墓制から単墓制へ移行する際に埋め墓を集落共同墓地として選定したことである。石鏡集落の墓地は，土葬両墓制の２つの墓地→火葬による埋め墓への集落共同墓地，と変化して行くなかで，祖霊を祀る場としての象徴性と独立性を獲得して行ったと考えられる。

ま と め

３集落の集落共同墓地と集落の関係の空間分析を行い，立地特性を考察した結果，⑴埋め墓は標高の低い海際の砂地に，詣り墓は寺院の隣地や後背地等の標高の高い場所に位置し，視認性は埋め墓，詣り墓いずれも海である労働空間からは高いが，ムラという居住域からは低い⑵囲われた地形や川を挟んだり，ムラとの高低差があるなどの場所に墓地を立地させることで墓地空間の独立性が高められている⑶墓地へのアプローチがハマから直接アプローチいたり，寺院を介して進入したり，墓地と道との間に高低差があるなど，空間的，動線的に必ずしも連続していない，などが明らかとなった。墓地への進入方法をみると，⑴神島ではハマから直接墓地へ入り，ハマとの高低差が15m ある。⑵菅島では，ハマから直接入りハマとの高低差がほとんどない埋め墓と冷泉寺の寺院内を通って道との高低差が約20m ある背後の急斜面地に立地する詣り墓に入る。⑶石鏡集落では，ハマとの高低差約18m ある埋め墓にハマから直接入る，と，単に墓地の管理や墓参の利便性だけでなく，墓地を空間的に断絶して，特別な区域として扱い，日常とは異なるアプローチを経て到達するという仕組みをつくり出しているのではないだろうか。

沿岸集落にとって海は生きるための恵みをもたらす反面，高潮や津波など自然災害を及ぼす存在であり，その意味で沿岸集落は，環境との「対面の仕方」がダイレクトであり，また，斜面地という地形的要因によって土地利用の制約が強く，生活空間（ノラ，ムラ，ヤマ，ハマ）が限定された範囲に示されているという特徴をもち，本論で取り上げた志摩の３集落は，両墓制の詣り墓が手軽に墓参可能なムラに置かれ，遺体を葬る埋め墓がヤマの領域に置かれる，と捉えることもできた。そのなかで，日常の労働空間の中に視覚的な連続性を持つ位置に詣り墓が存在することは，特筆すべきことである。この際，もう一つの日常性，居住域と集落共同墓地と関係の関連が希薄であることは留意しておくべきであろう。これには日本人の古くからの死や死者に対する感情や感覚が大きく関わっていると思われる。こうした問題を解決するために，遺体を埋葬している埋め墓と墓参の対象である石柱をもつ詣り墓の二つをもつ両墓制が発達したことは民俗学の分野で多く指摘されているが，それによって死や葬送の抽象化に拍車がかかったとも考えられる。今後，さらに調査検討事例を増やし，その理解を深めつつ，現在ほぼ分離してしまった「死の穢れ」と「祖霊への畏敬」の感覚を，現代的な意味で解釈していきたいと考えている。

本論は，こうした墓地の立地特性の分析結果から，志摩地方における集落住民の墓地の立地選定に対する空間認識の有り様を考察したが，墓地と集落の空間的な関係についての着眼点を明確にすることができたと考える。